

5 ま と め

我が国産麦の自給率の向上を図るにはコスト低下が第一であり、全面全層播による投下労働時間の節減と多収穫を図ることが可能になったので、今後は水稻作

に導入した機械の多面利用により、麦生産の増加が期待できる。次回は第2報として労働配分と機械利用経費等について報告したい。

なお、水田高度利用による稲麦作機械化体系確立への一方法として、この方法を進めて行く考えである。

青刈りヒエの栽培法について

第2報 播種期対播種量ならびに播種様式について

大野 康雄・佐々木 邦年

(岩手県農業試験場)

得たので報告する。

1 ま え が き

青刈りヒエに関する試験は自給飼料強化を目的に昭和47年度から品種比較試験を実施している。第1報では青刈り用ヒエの適品種について検討した結果、暖地系長稈晩熟性の飛騨在来が生育揃いが良く、稈が軟らかく、倒伏に強く、多収性であったことを報告した。今般、標題について検討した結果、2・3の知見を

2 試 験 方 法

普通畑(岩手農試ほ場) 火山灰土壌

供試品種 飛騨在来(長稈・晩熟性)

供試条件 第1表のとおり。

施肥量(g/a) N:0.8+0.3 P₂O₅:2.0 K₂O:2.0

追肥時期 6月30日

第1表 供 試 条 件

項 目 播種様式	5月11日播				5月27日播				6月8日播			
	50	100	150	200	50	100	150	200	50	100	150	200
条 播	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
全 面 播	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
備 考	刈取り時期各区とも8月25日、ならびに9月1日に収穫											

3 試 験 結 果

1 出芽の状況

5月11日播に比較して、気温が上昇する5月27日、

6月8日播が各播種量区とも出芽勢が高い傾向であった。供試品種飛騨在来は感温性の高いことがうかがえる(第2表)。

第2表 生育調査成績

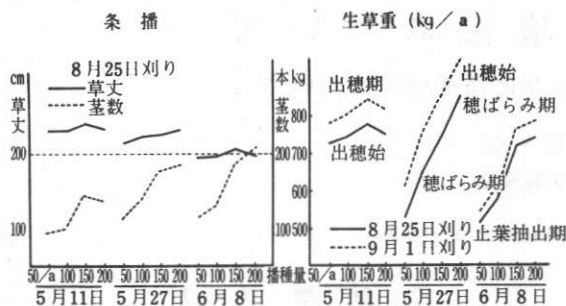
(条播栽培)

(全面栽培)

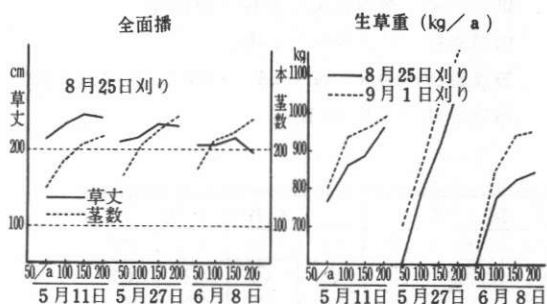
播種 時期 (g/a)	項目 播種重	出良 芽 の否	初の 期良 生育否	生 育 調 査				出良 芽 の否	初の 期良 生育否	生 育 調 査			
				7 月 16 日		8 月 2 日				7 月 16 日		8 月 2 日	
				草 丈	茎数/m ²	草 丈	茎数/m ²			草 丈	茎数/m ²	草 丈	茎数/m ²
				(cm)	(本)	(cm)	(本)			(cm)	(本)	(cm)	(本)
5 月	50	ヤヤ不	良	92	43	162	89	中	中	82	48	162	176
11 月	100	中	"	94	53	162	102	"	"	96	64	170	180
15 日	150	"	"	97	56	164	145	良	良	106	72	171	284
20 日	200	"	"	89	76	155	106	"	"	104	88	171	252
5 月	50	中	良	63	78	136	139	中	良	60	94	125	188
27 月	100	良	"	72	155	140	172	良	"	69	126	139	252
15 日	150	"	"	81	205	152	228	"	"	75	220	146	292
20 日	200	"	"	82	211	158	228	"	"	87	244	159	284
6 月	50	良	良	48	106	124	149	中	中	38	100	106	308
8 月	100	"	"	51	116	123	149	良	良	45	216	120	336
15 日	150	"	"	52	218	133	205	"	"	53	288	127	352
20 日	200	"	"	47	248	123	257	"	"	48	312	129	447

2 草丈、茎数の推移

草丈は各播種量区ともほぼ 5 月 11 日 > 5 月 27 日 > 6 月 8 日の順に高い。茎数は播種時期別では 5 月 11 日, < 5 月 27 日 < 6 月 8 日の順に多く, 播種量別でもほぼ 50 g < 100 g < 150 g < 200 g に推移した (第 1, 2 図)。



第 1 図 主要成果の具体的データ



第 2 図 主要成果の具体的データ

3 生草重について

条播栽培の 5 月 11 日播が 8 月 25 日, 9 月 1 日刈りとも播種量 50 g < 100 g < 200 g < 150 g の順であったが, 他は各播種時期とも 50 g < 100 g < 150 g < 200 g と播種量が多いほど多収であった。播種時期別では 5 月 27 日播で 8 月 25 日刈取りの播種量 200 g, 9 月 1 日刈取りの播種量 150 ~ 200 g が多収を示した。また, 5 月 11 日播に比較して, 6 月 8 日播は刈取り時期を 5 ~ 6 日遅らせることにより, 播種量 150 ~ 200 g で, 5 月 11 日播とほぼ同収が得られる。

4 播種様式について

条播栽培より全面播栽培が多収で, かつ省力的であるが, 5 月 11 日播は生育初期の雑草対策が問題点として残った。

4 ま と め

ヒエの青刈り用として有利な点は第 1 報で述べたが, ヒエの播種期幅は比較的長い, 一般に早播ほど収量が多く, 条播・全面播栽培とも播種量 a 当たり 150 ~ 200 g が収量的に安定している。

なお, 供試した飛騨在来は出穂期ころまでは倒伏に強いので, 全面播栽培は施肥量 (窒素) と播種量増によって, さらに多収性と茎の細い嗜好性の高い良質な粗飼料が得られるものと思われる。

青刈りヒエの栽培法について

第 3 報 播種量と窒素施肥量

大野 康雄・佐々木 邦年

(岩手県農業試験場)

1 ま え が き

第 2 報に続いて, 自給飼料強化のために, 青刈りヒエの栽培法の残された問題点の一つとして, 標題を検討した結果を報告する。

2 試 験 方 法

普通畑 (岩手農試ほ場) 火山灰土壌
供試品種: 飛騨在来 (長稈・晩熟性)
供試条件: 第 1 表のとおり

播種期: 5 月 11 日
栽植様式: 60 cm × 24 cm

3 試 験 結 果

1 草丈・茎数の推移

播種量別では草丈・茎数とも標準 a 当たり 50 g に比べ, 50 g < 100 g < 150 g の順にまざった。

施肥量別は標準 a 当たり N 成分量 1.1 kg (0.8 + 0.3) から 1.8 g (1.2 + 0.6) までは最終的に施肥量が多いほど草丈は高くなり, 茎数も増加の傾向がある (第 1